長野県中ノ沢出土の土器と土製耳飾

向 坂 鋼 二*

Potteries and Clay Earrings

found at Nakanosawa Site in Nagano Prefecture

Koji MUKOZAKA*

The Nakanosawa Site is situated in the midst of an eastern highland so-called Nobeyama Plateau in the Yatsugatake Mountains.

In November 1954, Chosuke Serizawa, Masakazu Yoshizaki and Shigeya Yui excavated this site and corrected many fragments of the potteries, stone-implements and clay earrings. These remains were dug out from single layer which is black soil accumulated on a volcanic ash layer. Therefore from the point of the archeological view, all those relics are regarded to have existed at the same Period. My typologica research has been concentrated on the potteries and clay earrings only.

The potteries are divided into two groups-patterned and non-patterned ones. The former are redivided into two sorts; "cord-marked" and "patterned with incised-lines or clay nicked-strings."

The "cord-marked" pottery has a close connection with that found in Tohoku and Kwanto districts in Japan.

And the others are those which were native in south-eastern parts of Nagano Prefecture extending to Yamanashi Prefecture; it seems that they may have something common to the contemporary types in Tokai District.

Chronologically, the Nakanosawa site comes under the category of the beginning of the latest Jomon Period (Jomon Period is divided into five), about 1,000 B. C.

I はしがき ここに発表する資料は、昭和29年11月 5・6 両日にわたつて、芹沢長介氏を担当者として、当地在住の由井茂也氏、それに吉崎昌一氏を加えた三名が発掘調査した資料を中心としたものである。本来ならば、芹沢氏による報文が公にされて然るべ

---

* 市立浜松博物館 * Hamamatsu Municipal Museum
(1961・1・10 受付)

き性質のものであるが、氏の特別な御厚意によつて、発掘調査にも加つていない部外者の私が筆を執ることになった。また、出土資料の一部は、由井茂也氏が保管されておりその発表も芹沢氏を通じて同氏の了解を得ていただいた。こうしたことは、通常求めでも得られない稀有の事例に属するものというべく、特記して両氏の御厚意に対して厚く感謝の意を表するものである。

なお、第6図に掲載した資料は、広島大学考古学研究室に保管されている、木下忠氏の委託品であるが、松崎寿和教授と潮見浩両氏を通じて、ここに初めて公表させていただくことができた。記して木下・松崎・潮見三氏に対して感謝の意を捧げる次第である

II 遺跡の位置 行政区劃は、長野県南佐久郡南牧村野辺山・中ノ沢となつていて、八ヶ嶽の東側山麓にある。千曲川の上流に西方から西川と呼ぶ支流が注いでいるが、これには更に板橋川という小支流が分れている。この辺一帯は、広く野辺山原と称する高原地帯であつて、落葉松・白樺の林の西方に八ヶ嶽の秀峰を仰ぎ、東に奥多摩・奥秩父に

第1図 遺跡の位置

連なる山並を見る。遺跡は、その野辺山高原が板橋川の溪谷に面する小支丘上に存在している。遺跡の西約1.8 kmには、北北東に走る佐久甲州街道が、また南約1 kmには西川を渡る小海線の鉄橋がある。

調査の概要 昭和29年、遺跡の存在する地点に道路が開かれ、そのため遺跡の主体部が破壊された。それを当地の由井茂

也氏が発見されて、芹沢長介氏に報告されたのであつた。芹沢氏はその時採集されてあつた土器片中に、縄文時代晩期のものが入っていることを注意され、破壊された残りの部分を発掘調査されたのである。調査には、11月5日、6日の両日が充てられ芹沢・由井・吉崎の三氏が参加されただけであつた。調査によれば厚さ約30cmの黒色土層が遺物包含層となつていて、上部に約5cmの表土層をかぶつていた。黒色土層の下位は、ただちに、野辺山原層と呼ばれる泥流を思わせる礫層で、褐色土に巨大な礫がはさまつていて、この層は無遺物層で、遺跡の基盤をなしていることが知られた(日本考古学年報 7—昭和29年度—1958年に本遺跡調査に関する芹沢氏の短報がある)

出土遺物の量は、リング箱1杯分位であつて、土器片がほとんどであつた。土器以外の出土品としては、土製耳飾・石鏃・石匙等があるが、都合によりここでは専ら土器と土製耳飾だけを取扱うことにした。

III 出土土器の分類 I類(掘之内I式土器) 第2図1 胴部でくびれる浅鉢形を呈するらしい。縁帯文風の口縁部に突起が附され、一孔を穿つ。胴部以下の文様の一部が破片下端に残っている。

第2図 土器拓影 (その1)

II類(土着の型式) 第2図2~31・第3図32~53

A 口縁部に凸帯の附されたもの(2-10) 器形は深鉢形を呈し、2・5の如く波状をなすもの。7・8・10の如く突起を附すもの等がある。凸帯には2のように刻みを施さないグループと、3-10のように刻みや押捺を加えたグループがあり、後者の場合には更に口縁部や胴上半部に沈線文様を施すことがある(8・9・10)。

B 口唇部を内側に肥厚させ突起を附したもの(11-16) 16(第5図16の実測図)の如く波状口縁の深鉢形を呈する例が一般的らしい。11・13も明らかに波状口縁であるし、14, 15もその可能性が高い。口唇部を内側に強く肥厚させるのが、顕著な特徴であつて、これに精選された胎土、波底部の突起、口縁部における二条の沈線、磨研による器面の滑沢等の諸特徴が随伴している。胴上半部には文様の施されることがあつて、14, 16の如く羽状沈線を用いる場合が多いらしい。こうした点では、8, 9, 10の土器は、むしろB類の中に含めて理解した方が良いかも知れない。

C 羽状沈線文に類似した文様の施されたもの(17-19) 深鉢形を呈する。平縁と推定される。18と19では、斜めの短線を横位に連続させ、2~4段の文様帯を構成している。18と19とでは短線の施文方向が逆になつていて、1段毎に方向を逆にし一見羽状沈線文の如き文様効果を持つものの存在が予想される。こうした文様の施し方から注意すれば、16の土器は本類と同等の扱いをすることができよう。17は、口唇部に小突起が附され、文様は斜行した短線を縦位に施したものである。

D 口縁部に平行沈線文帯の施されたもの(20-24) 21, 24の如き波状口縁のものもあるが、通常20, 22, 23の如き平縁の深鉢形である。沈線は2条か3条で、20のように細かい場合と22, 23のように太い場合とがあり、前者は直口であるが、後者は内曲ないし内彎することが多いらしい。突起の附されるのも前者である(20)。24は凸帯が附されている点で、A類に近く、口唇部が内側に肥厚する点で、B類に近い。

E 曲線文様の施されたもの(25-31) 30, 31を除き深鉢形と推定される。27は或は浅鉢形を呈するかも知れない。26と28は、弧線を組合せた一種の入組文を構成している点で極めて特徴的である。28aと28bは同一個体と判断したものであるが、28bは天地逆と見誤つた可能性ありとしても、文様は正確なシンメトリカルでない。27は波頂部に、押えのある瘤状突起を附し、ここから左右に二条の弧線が走る。30と31は壺形に近い器形をなすものである。30の肩部には雷文風の文様が施され、31の胴部には平行沈線に囲まれた中に、一見工字文風の文様が見られる。この文様は注意して観察すると、二つの三叉状文を上下に連結させた間を、弧線と直線で充填したといったモチーフを持つものであつて、いわゆる晩期後半の「工字文」とは本質的に異なるものである。

F 沈線間に突刺の施されたもの(32-41) 外反(37)、内彎(39)の器形差はあるが総じて深鉢形をなす。文様構成の上で更に、1. 平行線間に突刺、点列の施されたグループ(32, 33, 36~38, 40, 41), 2. 弧線と突刺、点列が組合されたグループ(34, 35) 3. 沈線の区劃内に突刺の充填されたもの(39)の三種が区別され得る。34では口唇部に刻みを入れた突起を附す点が注意をひき、38では、二つの刻みを入れた瘤状突起が注目され、40と41では、三叉状文と刻みのない瘤状突起が注意される。35は刻みのあ

第3図 土器拓影 (その2)

る凸帯が附された点でA類に近く、36は、8~10 やB類のものに近い特徴をそなえている。

G 無文粗製土器 (42~53) 採集された土器の9割以上は、文様の施されていない破片であつた。そして明らかに無文粗製土器と認められる口縁部破片数は、全体の5割を超えている。

一般的にいつて、口縁部のやや内彎の傾向を持つ深鉢形を呈するが(42, 44~46, 49, 51, 52), 直口のもの(43, 47, 50) や外反のもの(48, 53) もわずかに認められる。42の如く波状をなし波頂部に押えのあるものは稀といつて良いだろう。43, 44のように、口唇部上に押捺の施された例は余り多くないが、粗製土器中の1割近い数値を示す点は一応注意されるべきであらう。45の如く口唇を平且にならす例もやはり少なく、一般には円味を持つ47や50, 51等の断面形を示している。

Ⅲ類 (安行Ⅱ式及びⅢA式) 第3図54~58

A 帯縄文と瘤状突起の施されたもの(54~56) 胴部でくびれる波状の深鉢形土器である。54と55には、顕著な帯縄文が施され、波底部に従位の、帯縄文内に横位の瘤状突起が附されている。56の場合には、明確な帯縄文とならず、弧線を配した磨消縄文といつた方が良い。二つの刻みを入れた瘤状突起も、心なしか退化して見える。そして54・55と56とでは、縄文の撚りの方向がそれぞれRLとLRという風に逆となつている点は特記さるべき差違である。

B 三叉状文の施されたもの(57・58) 57a—dは同一個体と思われる破片であつて、器形は台付の浅鉢形と推定され、波状の口縁部をもつ。波頂部に刻みを入れ、口縁部に縄文帯(LR)をめぐらして波頂近く大きな三叉状文を陰刻している。大きな三叉状文の下には、二つの三叉文を抱合せて中心に同心円を配し、その下にまた縄文帯をめぐらして文様部を終る。なおこの土器には内面に漆状の塗料が塗布されている点に注意しておきたい。58は、左肩に三叉状文の一部を見せる小破片で、器形その他は明らかでない。

Ⅳ類 (亀ヶ岡式土器及びこれと関連ある型式) 第4図59—74

A 入組文、平行線間の点列、二つに分かれた口唇部の突起等の施されたもの(59—66) 59は口縁部に沈線による入組文様をめぐらしており、胴部には縄文(LR)が施されている。61と64には、いわゆる弧線入組文が認められる。62と63では、平行線間を点列で充填した文様が顕著である。60—64はいずれも鉢形を呈し、縄文(LR)が施されている。65と66は、沈線のみ施されたもので、66では頸部のくびれた浅鉢形の器形が推定される。本類はいずれにも、二つに分かれた突起が附されている。

B 羊歯状文及びこれと近い文様の施されたもの(67—73) 70(第5図70の実測図)が頸部でくびれた皿形をなす他は、鉢形の器形をとると考えられる。67—70では明らかに羊歯状文が頸部文様として使われている。71—73では代りに、平行線間に点列を並べた文様を配している。67, 68, 70—72には口唇部に二つに分かれた突起または刻みが加えられ、69を除き胴部には縄文(LR)が施される。71, 72では縄文の存否が明らかでない。また69—73では口唇部近くに、S字状文(69・70)、弧線文(71, 72)、Y字文

第4図 土器拓影 (その3)

第5図 土器実測図

(73) 等が施されている。これはA類の59や60との文様上のつながりが暗示される。

C 口縁部内面に文様帯の施されたもの(74) 皿形の器形を呈し、口唇部を内側に肥厚させて、そこに表と同様の文様帯(平行線間の点列)を施した土器が一片存在した。胎土も精選され、器面は磨研されている。表胴部には縄文(LR)が認められ口唇部には特殊な刻みを加えられている内面には一面に赤色顔料(丹?)が塗布されている。全体の感じとしては作りが精緻で華奢である。

D 雷文の施されたもの(75—79) 78が直口の鉢形をなすと推定される他は、75(第5図75の実測図)で示される如き口縁部の内曲する浅鉢形を呈する。口縁部に上下を縄文帯(LR)で区割られて、いわゆる「雷文」が施されている。雷文には、75の如く鍵手状のモチーフが上と下から組み合わせつつ構成されるものと、78の如く沈線が連続した構図で構成されるものと二種ある。76と77は前者に属し、79は後者に属すると見られる。

V類(型式不明) 以上の他に、型式の明らかでない土器群が若干存在する。81は口縁部破片で磨消縄文(RL)が施されている。III類に近い特徴を具備している。82は頸部のくびれた鉢形か壺形の器形をなし、くびれ部の平行沈線下胴部に縄文(LR)が施されている。胎土・焼成・縄文の施文方法は、N類に近い特徴を持っている。83—87は、縄文だけが施されたもので、型式的特点是はほとんどつかめない。86では同方向の縄文(LR)原体を二つ、別の紐でしばって回転させ、羽状縄文の効果を出している。87は恐らくRLの縄文原体の端を結んで縦位に回転させたものであろう。

V 特別な用途に用いられた土器 80に示した土器片は、口縁部の内曲する浅鉢形土器の破片であるが、断面図に斜線で示した様に、厚さ0.5mm位のアスファルトが内面から口唇上にかけて附着している。また特別な用途とは云えないけれども、63と64の土器の表面と69の土器の内面には、炭化物が附着していて、これらの土器がいわゆる「精製土器」として分類されるにも拘らず、煮沸形態としての用途に向けられていたらしいことを示している。(精粗の区別は厳密に利用法を反映した分類法とはいえないだろう。文様は器形(利用法に關係)と密接に関連しているから、手の込んだ文様が施されてい

るからといつて、それが煮沸用に利用されても不思議とはいえないだろう。)大和久震平「柏子所貝塚」能代市教育委員会1957年)

V 出土土器の編年の位置 I類 これは明らかに、関東地方から中部地方の東半分にかけて広く分布している堀之内式土器の特徴を具備しており、後期初頭に位置づけることに異論はないと思う。

II類 Aとしたグループは、東海地方に広く普遍的に分布する一種の凸帯文土器と関連が認められる。山内清男氏は、三河吉胡貝塚の資料を整理されて、これらの凸帯文土器を晩期旧Aという型式にまとめられ、晩期初頭に位置づけられた¹³⁾また、遠江蜆塚遺跡²⁾(後藤守一教授を団長として1955年~58年にかけて浜松市が発掘調査を行ったが、貝塚をはずれた部分から晩期前半の土器群が発見された)や駿河天王山遺跡(清水市宮加三の扇状地上に残された遺跡で、市原寿文氏が整理されて報告書近刊の予定)においても、この種の土器群は、やはり晩期初頭の土器群に伴出している。

Bとしたグループも、Aのグループと同様のあり方を示している。しかし、この種の土器は、むしろ信濃南部から甲斐にかけての地帯により主体的に分布しているようであつて、この地域の晩期初頭を特徴づける土器群と考えられる。この点は次項で論ずる予定である。この土器群中16の土器は、その所属する時期に異論の生ずる余地のあるもので、人によつては、これを後期中葉に位置づけるかも知れない。しかし、胴部に施された羽状沈線文については、これを晩期初頭に行われたとするかなり確固たる証拠がある。既に発表された資料としては、吉胡貝塚第四トレンチ下層下半出土とされる土器群に⁴⁾、14と16に見られると同様の羽状沈線文の施された土器が入っている。この層位から出土した土器群は、三河において晩期初頭に位置づけられるものである。また、未発表の資料であるが駿河天王山遺跡においても、大洞BもしくはBC式土器を伴出して明らかに晩期初頭に属する層位中から16の胴部文様や18、19の如き文様を有する土器が、かなりの量出土している。更にこれらとは別に、信濃上ノ段遺跡⁹⁾から出土した土器群中にかなりの量、羽状沈線文の施された土器が入っている。宮坂氏が、第一群第四類として分類されたものがそれである。従来、この種の羽状沈線文は、加曽利BⅡ式土器の文様との関連において理解されていたが、芹沢氏は早くからこの種の意見に疑念をいだかれ、私も東海地方の各地遺跡を踏査している内、上ノ段遺跡発見の如き文様のものは宮滝式土器類似の土器群に伴出するらしいことを知った(例へば蜆塚遺跡第三次発掘調査(1957年)において、麻生優氏担当の第一貝塚の上層から、大量の宮滝式類似土器にこの種の羽状沈線文ある土器が伴出している)それ故、羽状沈線文自体の变化としては、加曽利BⅡ式土器とは別の姿で、上ノ段→中ノ沢・天王山という変遷のあつたことが、ほぼ確実な事実と認められる段階にきたと思つている。その場合上ノ段出土のものを後期末、中ノ沢・天王山出土のものを晩期初頭と位置づけることができる。以上のような理由から、16の土器は晩期初頭に位置づけたわけであるが、このことは、他の土器類のあり方と何等矛盾しないどころか、これを後期にさかのぼらせることの方がはるかに不自然なことといわねばならない。

Cとしたグループについては、繰返し述べるまでもなく、16に見られた羽状沈線文の

変形と見ても差つかえはなく、いずれも晩期初頭の位置は動かないであろう。

Dとしたグループは、これといった特徴に乏しいけれども、晩期の初頭をさかのぼるものではない。

Eとしたグループのうち、27はAのグループと全く同じ在り方を示しており、同種のものには沈線間に点列を加える例があつて、Aのグループを沈線で表現し直したアイデアとも受け取ることができる。26、28といった文様構成は、直感的に大洞BもしくはBC式土器に用いられる弧線入組文を連想させるものである。特に土版や岩版の類に用いられる文様のモチーフに共通性が窺取される。後述する61の土器から縄文手法を抜出してした場合と比較するのも面白い。28と全く同様の文様を配した土器は、大和宮滝遺跡¹¹⁾、駿河天王山遺跡、甲斐上条遺跡¹²⁾等に出土例が知られている。いずれも晩期初頭と考えられる土器群と関連をもっている。31の土器に関しては、既に永峯光一氏が論及された如く⁹⁾、文様の手法上からも、大洞A式土器の「工字文」とは区別されるべき性質のものである。永峯氏が「粗大な工字文」という表現を使われて、これを晩期前葉に位置づけられた点には卒直に賛意を示すものである。しかし大和宮滝遺跡や、竹之内遺跡出土例を、「晩期後半の文様」と考えられた点についてはうなづけない。それは、近江滋賀里出土土器中にもすでに、粗大な工字文のある土器が散見され（京都大学文学部考古学研究室にて実見）、東海地方にも点々と同種のものが認められ（例へば三河麻生田貝塚（豊橋公民館資料実見）、遠江半場遺跡等）いずれも晩期前葉の土器群と関連を持つて存在しているからである。

Fとしたグループ中、32、33の類は駿河天王山遺跡に類例があり、34、35の類は文様構成上、近江滋賀里遺跡の土器（京都大学文学部陳列館『考古図録』新輯 図版 5 左上 1951年）や関東地方の安行Ⅱ式土器の或種のものに共通性が認められる。また38～41の類は、瘤状突起や三叉状文の存在からみて、晩期初頭を中心とした時期のものと考えて大過ないであろう。

Gとした粗製土器に関しては、適当な比較例がないが、私の経験では、遠江蛸塚遺跡の貝塚をはずれた地点の土器群に含まれる粗製土器や、遠江奥泉遺跡¹³⁾出土の晩期前葉の粗製土器等と比較してみると、43、44の如き土器の含有量、口縁部がやや内彎の傾向を示す点等にいちじるしい共通性を見出すことができる。強いて相異点といえ、これら遠江地方の土器には、2～3割位条痕文土器が含まれるという点である。これは地域差と認むべきものと思われる。

以上記した通り、Ⅱ類土器は、当地方に土着の土器型式であつて、その編年の位置は晩期初頭、漠然といえ晩期前葉の時期と結論づけられる。

Ⅲ類 これらは改めてのべるまでもなく、立派な安行式土器であつて、Aとしたものは安行Ⅱ式の精製土器（帯縄文系土器）、Bとしたものは安行ⅢA式の精製土器である。ただ、54、55がRLの縄文であるに反して、56～58がLRのそれである点が注意される。それにこだわるわけでもないが、両者には何か型式上の差がありそうに思える。しかしここでは両者が、土着のⅡ類土器と共存関係にある点をより重視したい。AとBを一括してⅢ類としたのもそのためである。（最近、関東地方において、安行Ⅱ式と呼ば

れていた土器が、ⅢA式土器と同一層序内に共存する例が2, 3報告されている。「雨の横橋貝塚発掘『ミクロリス』1956年、早稲田大学高等学院歴史研究部「千葉県香取郡奈土貝塚発掘報告書」1958年他に川口市石神貝塚に施いても同様の調査結果が知られているようである）。

Ⅳ類 Aとしたグループは、口唇部の突起、平行線間の点列、弧線入組文等の存在から、大洞B式もしくはそれに類似した土器といえよう。

Bとしたグループは、70の土器に代表されるように、立派な羊歯状文が使われておりこれを大洞BC式土器とすることには異論はないと思われる。

Cとした74の土器は、一片ながら他と著しく異つた特徴を持つていて、これを大洞C₁式土器より古い時期のものとすることはむずかしい。本遺跡出土土器中最も新しい要素を示す資料といえよう。

Dとしたグループは、中部地方の晩期前葉の遺跡からは、少量ながらほとんど例外なしといった普遍性を持つて発見される一群の雷文土器のグループである。市原寿文氏はこの雷文自体の文様の変化を注意されて、75の如き構図から78の如き構図への変遷を考えられた。（市原氏は駿河天王山遺跡の発掘資料を整理されて、この変遷の序列を考えられた。その場合85例は大洞BC式に78例は大洞C₁式に伴出するとされた。私の調査した遠江奥泉遺跡でもそれを立証するような調査結果が知られた）それに従えば、この場合も、78は74と共に最も新しい要素を示す資料となろう。

かくして、Ⅳ類土器として一括された土器群も晩期前葉の時期を代表するものであることが明らかである。

Ⅴ類 これは型式の特徴に乏しいので取上げないことにする。いずれにしても以上のべた編年的な位置観を根底から変化させ得る資料ではない。

こうして、中ノ沢遺跡出土の土器群を検討してみると、Ⅰ類とした1片の堀之内Ⅰ式土器と、Ⅴ類Cとした1片の大洞C₁式土器を除けば、すべて晩期前葉の時期に入ってくる、更にこれを大団に表現すれば、晩期初頭に編年することも可能である。その場合Ⅱ類に伴出したと考えられるⅢ、Ⅳ類中に、従来の編年観では、前後の時間的關係に並べられていた安行Ⅱ式とⅢA式及び、大洞B式とBC式の土器が、恰も共存の姿で存在している点が、一つの大きな問題点として浮び上ってくる。つまり、従来の編年に誤りがあつたか、さもなくば土着の土器型式としたⅡ類土器が、更に細分されるべきことを教えているのか、という問題である。この点に関しては、なお慎重な検討が必要とされるので、深く立入らないで置こうと思う。

土器型式の分布 土器型式が、空間的にある定つた分布範囲を持つているということは、土器の型式論的な研究が組織化された頃にはすでに周知の事実とされていた¹²⁾。しかしその後の土器研究が、土器型式を年代の尺度としてのみ利用し、型式変遷の時間的な縦の連りを整備するという点に興味の中心が偏重して行く方向に進められたため、1つの型式の空間的拡がりを追求め、型式相互の關係を明らかにするという努力は等閑に附された感があつた。しかし、土器型式を単なる年代上の尺度としてのみ利用するだけでなく、これを人間の集団と関連づけて理解しなければならないという意見が、最近

特に強く主張されるようになってきた。(やや古いところでは杉原莊介教授の「原史学序論」1941年に体系的な主張がなされ、最近では岸沢長介氏の「縄文土器」『世界陶磁全集』1. 1958年に好論がある。そのためかどうか、近刊の論文や報告書に、土器型式の組成の吟味と分布、他地域の要素の抽出等の記述や論述が急増してきた。私もその一人であつて、すでに一般的な問題について簡単な愚見を問うてみた⁷⁾。

ところで、本遺跡出土土器中、Ⅰ類を除外すれば、いずれも晩期初頭に位置する土器群であり、Ⅲ—Ⅴ類の如き明らかに東日本の要素を別にすれば、Ⅱ類こそ当地方に土着の土器型式であることが、明らかにされた。ではこうした内容をもつ土器型式は、一体どういう分布のあり方を示しているであろうか。

ここで注意すべき点は、他遺跡出土の土器群と比較する際に、例へばⅡ類A、B、…Gをそれぞれ分解してはいけないということである。自明の理であるが、こういう風に分離して比較すると、分布圏がぼやけてしまつてつかみどころがなくなつてしまう。このことは早期・前期・中期といったより古い段階の縄文土器と本質的に異つた点であつてこの観点からも後期・晩期は一つの時代区分として大きくまとめられるであろう。

本遺跡出土の土器型式とほぼ同一の内容をもつ土器群を出土した遺跡のうち、主なものを列挙すれば次の通りである。

Ⅰ 長野県諏訪郡北山村上ノ段⁹⁾

中ノ沢遺跡とは八ヶ嶽をはさんだ反対側の山麓にある。宮坂氏の報文にのせられた資料を検討すると、明らかに後期前半のものと思われる少量の土器(堀之内Ⅱ式・加曽利BⅡ式)、後期中葉と考えられる土器(加曽利BⅡ式、宮坂氏の分類では第六類の一部と第五類のほとんどすべて)、後期末と考えられる土器(先に羽状沈線文の所で指摘した土器群で、「上ノ段式」と仮称しておく。宮坂氏の第四類のほとんどすべて)、それに問題の晩期初頭の土器が存在している。宮坂氏が第一類とされたのは、恐らく中ノ沢Ⅱ類Bであり第二類とされたものも広くⅡ類Bに含められるものであろう。また第三類中には明らかに中ノ沢Ⅱ類Aが入つており、同じくⅡ類Bも若干含まれている。更に第七類の中には、中ノ沢Ⅲ類BやⅣ類A・B等他地域の要素も指摘される。更に一層細かく調べてみると中ノ沢Ⅱ類D・F等も稀に認められる。こう見てくると、上ノ段遺跡の晩期の資料は、中ノ沢のものとはほとんど一致した組成を持つていることがわかる。

Ⅱ 山梨県北巨摩郡日野春村長坂・上条¹⁰⁾

富士川上流が釜無川となつて、中央線に沿ひ長野県境に近く分け入つた地域、韮崎市と小淵沢の中間に位置する遺跡である。大山柏氏他二名の報文によれば、主体となる土器群は、中ノ沢出土のものに極めてよく一致している。第一類とされているのは、加曽利EⅡ式土器であつて問題外である。第二類とされたものは明らかな加曽利BⅡ式土器とみられ、これも問題の外に置いて良い。第四類の一部と(浮線網状文ある土器)第六類は晩期末のもので、これも今回は別問題となる。これらをすべて除外して行くと、残りはほとんど晩期初頭の土器群として一括される。(第五類中には、明確な「上ノ段式」土器も含まれている。第五類をされているものの中には、中ノ沢Ⅱ類A・Eが、第三類とされた中には、Ⅱ類B(中ノ沢出土16の土器波頂部と良く似た土器に注意したい)。E

・F・Ⅲ類A・B・Ⅳ類A等が含まれており、更に第四類中には、Ⅱ類Gの如きものやⅣ類Bが含まれている。

Ⅲ 静岡県田方郡函南村畑毛・白山神社（第6図）

資料は乏しいけれども、注目すべき遺跡である。伊豆半島のつけ根の部分の中央辺にあたる。伊豆畑毛温泉として知ら

れているところでもある。広島県教育委員会の木下忠氏が在静中集められた資料で、私は広島大学考古学研究室に卒論資料蒐集の旅を行った際実見することができた。今回松崎寿和教授、潮見浩両氏を通じて、ここに公表させていただく了解を得たものである。第6図1は、中ノ沢Ⅱ類Cと見られるし、同種の土器群

第6図 参考資料（静岡県田方郡函南村畑毛出土）

は、後述の天王山遺跡に顕著に認められる。2・3は中ノ沢Ⅲ類Bもしくは、Ⅵ類Aと考えられる。4・5は明らかにⅣ類Dに含められる雷文土器である。これらは表面採集資料ということであるが、わずかな資料でありながら、良く型式の特徴を表現している。

Ⅳ 清水市宮加三・天王山 日本平として有名な有度山塊の東崖から張り出した扇状地形上に残された遺跡で、1951年と52年の二回にわたり、大規模な発掘調査が行われた。報告書は市原寿文氏が準備されており、近く発刊の予定であると聞いている。詳細は報告書の出版をまたねばならないが、資料の一部を実見させていただいたところでは中ノ沢でⅡ類としたものはほとんど全部網羅されている。この遺跡で顕著な特徴は、中ノ沢Ⅱ類B16やCの如き羽状規線文及びこれに類似した文様を持つ土器が、かなりの量含まれている点である。第6図1に参考資料として掲げたものも同種とみられる。つまり、中ノ沢と天王山とは、土器型式の組成上のパライエティーに関しては全く一致した内容を持ちつつも、それぞれのパライエティーの占める比率の上で、若干の相違がみられるわけである。

Ⅴ 愛知県渥美郡田原町吉胡¹³⁾⁴⁾ 愛知県南部に、渥美湾をかかえて西にのびる渥美半島のつけ根にある貝塚で、300余体の人骨を出して古来有名であつた。貝塚出土の土器を、報文によつて検討すると、宮滝式類似土器群を除く他はすべて晩期のものであつて、これらは山内氏により晩期旧A・B、晩期中・晩期新と四分されている。晩期旧Aの中には、明らかに中ノ沢Ⅱ類Aと関連をもつ凸帯文土器がある。また旧の中には、Ⅳ類Bに近いものやⅣ類B等が認められ、粗製土器にもⅡ類Gと類似したものもある。しかし、久永氏や澄田氏が担当された第一・第四トレンチからは、晩期前葉の土器群に顕著な例として次の二種の土器群が含まれている。その1は山内氏が後期Aとされ、久永氏が寺津式と呼ばれるもので、縄文又は巻貝回転による擬似縄文を地文とし半載竹管による直線又は弧線を配した土器群である、この種の土器は遠江蛸塚遺跡までわずかに

及んでいる。そのⅡは数本の櫛状具で波状文を施した土器群で、久永氏は大宮式と称されているらしい。この種の土器は遠江にはかなり普遍的に認められ、駿河天王山遺跡にもわずかに認められている。以上二種の土器群は、その分布の中心を三河と尾張におくものといわれており、これらを含んだ吉胡貝塚の土器型式は、たとえ内に中ノ沢Ⅱ類の要素を含んでいても、全然別の土器型式として取扱わねばならない。

この他、長野県北部や岐阜県方面の土器型式も検討しなければならないが、勉強不足もあつて適当な資料に当たらない。千曲川流域に関しては、永峰氏の⁹⁾ により、中ノ沢Ⅱ類の様な土器の少ないことを知ることができる。北信には越後に近い東日本的な土器型式が分布しているのではないかとと思われるふしがある。

以上かなり粗雑な検討を加えてみた結果、中ノ沢Ⅱ類及びⅢ・Ⅳ類に示される如き土器型式の分布圏としては、南信・甲斐・伊豆・駿河という地域が選ばれることを明らかにし得たと思う。しかも、更に中ノ沢Ⅱ類Cや第6図1の如き土器の占める比率を重視すれば、この広い地域は中ノ沢遺跡出土器で代表される仮称「中ノ沢式」土器の分布圏と、天王山遺跡で代表される仮称「天王山式」土器の分布圏とに区分される。これに、吉胡貝塚出土のもので代表させる仮称「吉胡BⅠ式」土器の分布圏として三河・遠江を加えて地図上に表現すれば、第7図を得ることができる。(拙稿「土器型式の分布圏」『考古学手帖』21958年に於いては、晩期初頭の分布圏として、第4図に4つの分布圏を示した。それは、吉胡と蜆塚の資料を別の型式として認めたからである。ここではそれには触れないで両者を一括することにした)

VI 出土の土製耳飾について
由井茂也氏は、本遺跡出土の土製耳飾を8点分保管されている第8図に示したのがそれである。甲野勇氏の分類に従つたといわれる江坂輝弥氏の分類法によれば、次の通りとなる¹¹⁾。ただし耳栓をやめて耳飾とする。

1は栓状耳飾の一種とみられ素文で上縁径 3.2cm, 下縁径 2.7cm。高さ(厚さ) 2.6cm。完形品である。

2・3は輪狀耳飾(臼状といつた方が適切かも知れない)で、両者共完形品である。2は素文で、上縁径 4.1cm。下縁径 4.1cm, 厚さ2.1cm。上下両面共ほぼ同様に凹ませてある。3は上縁径 3.1cm, 下縁径 3.1cm, 厚さ1.5cm。上面はやや浅く底の平坦

第7図 晩期初頭における土器型式の分布図

な凹部を作り、周縁部に刻みを入れて簡単な文様としている。下面はやや深く臼状に凹ませている。

4は、破片のため全形はうかがい知れないが、おそらく滑車状耳飾であろう。厚さ1.

第8図 土製耳飾

3cm 推定径5.8cm

5は、破片ながら、透彫附耳飾であることがわかる。推定径6.7cm。文様は三叉状文の組合せである。

6は、厚手環状耳飾で、推定上縁径8.3cm、下縁径8.6cm、高さ2.3cmを計り粗大という形容の当る耳飾である。断面形は三角形に近く上端面に三叉状文を配したシンメトリカルな陰刻文がつけられる。三叉状文

内には赤色顔料（丹？）が塗布されている。

7・8は、薄手環状耳飾としてよいだろう。両者共に破片であるが、焼成もよく、作りも精巧である。7は内側に一本の沈線をめぐらせる。大きさは、7が推定上縁径4.8cm、下縁径5.0cm、高さ1.8cm。断面三角形をなす。8は推定上縁径3.5cm、下縁3.6cm、高さ1.8cm、断面弓形状を呈する。

栓状耳飾或は臼形耳飾と呼ばれ、また耳栓とも称されたこの種の土製品は、東日本に顕著に認められる遺品の一つであつて、その内の或種の形態のものは、亀ヶ岡式土器が西方に及んだのと軌を一にして西日本まで拡がったもののようである。しかも、西方に及んだ亀ヶ岡式土器もかなり限られた器形・文様をもつものであつたのと同様に土製耳飾の中にも、東北地方から一歩もはみ出さなかつた形態のものと、自由に各地に及んだ形態のものが存在したらしい。樋口清之教授が1940年に集められた資料に較べれば、その後の発見例は、氏の立論をかなり変更せしめる程の事実を生んだかも知れないが、氏のB型(栓棒形)及びC型(ボタン状)それにF型(碗形)とせられた形態のものが東北地方に限られ、以南の地に及んでいないという点やD型(輪状)E型(臼形)のものが、関東及び中部山岳地帯を中心にして分布し、東海道、近畿地方にまで拡がっているという点等は、今日なお基本的には正しい事実と認めて良いであらう¹³⁾。

中ノ沢遺跡出土品もそうした観点からみてやはり臼形と輪状(環状・透彫附)のものが多く、上ノ段遺跡や上条、天王山岡遺跡のものも同様の在り方を示している。つまりこの地域の土製耳飾は(中部以西のものも含めて)直接には東北地方のそれと関係なく関東地方に発達した形態のものを受け入れているということになる。このことは、亀ヶ岡式類似土器のあり方と共に充分考慮してよい問題のように思える。

Ⅶ まとめ 以上述べてきた所でも明らかなように、本遺跡出土の土器は、一口に云つ

て東日本的ではない。耳飾についてもその形態は、関東・中部的であつて、東北的なものではない。

一般的に云つて中部・東海地方の後期縄文土器は、前半期において関東的であり、後半期になつて関西的になるという事実が知られている¹¹⁾。その場合後期中葉の時期に、東海地方ではかなり独自性の強い土器型式が生れたが、中部山岳地方には顕著な例が知られていない。そうした動きが反映してかどうか、後期後葉になると、東海地方はいち早く関西風な動きに組入れてしまつたのに反し、中部山岳地方から駿河・伊豆にかけては、敏感な動きを示さなかつたもののようである。こうした点は、宮滝式類似土器の存否によつてたどることができる。その時期の中部山岳地方には、未だ磨消縄文手法を多少残した土器型式（先に上ノ段式と仮称したもの）が存在していたらしい。それは関東地方で安行Ⅰ式土器の行われた時期に相当するものと考えられる。

中部山岳地方が、土着の土器型式において全く磨消縄文手法から脱し切つて、西日本的な沈線文様に統一されてくるのは、晩期に入つてからのことで、中ノ沢遺跡出土土器（仮称中ノ沢式）や天王山遺跡出土土器（仮称天王山式註拙稿前掲考古学手帖2）は、そういう時点を代表する土器型式といえる。にも拘らず、文様の手法上、なお上ノ段式に認めた羽状沈線文を残存せしめている点に、充分西日本的になり切れない面を残しあえて中部日本的な性格の土器型式を形成している。つまり、西日本的な動きに刺戟されてか、遅ればせながら磨消縄文手法から脱皮したにも拘らず、ついに西日本化できずかえつて中部日本的な性格の土器型式が出来上つて行つたという所に、中ノ沢遺跡出土の土器型式で代表される、この地方の特殊性が潜んでいると思うのである。

Ⅷ あとがき 少ない資料でかなり大きなことを云つてしまつたという印象を与えたかも知れない。大方の御批判、御叱正を切に望むものである。

引用文献

- 1) 江坂輝弥 (1950) 板倉・千網皆戸両遺跡発見の耳栓 両毛古代文化 第2集
- 2) 後藤守一, 他 (1957~58) 蜷塚遺跡 浜松市教育委員会
- 3) 樋口清之 (1940) 日本先史時代人の身体装飾 人類学先史学講座 5
- 4) 久永春男 (1952) 第一トレンチ西半区域及び第四トレンチ「吉胡貝塚」文化財保護委員会
- 5) 宮坂英式 (1942) 長野県諏訪郡北山村上ノ段遺跡調査報告 史前学雑誌 14. No. 1
- 6) 向坂鋼二, 大塚淑夫, 他 (1959) 奥泉遺跡第二次発掘報告「釧」第9号
- 7) — (1958) 土器型式の分布圏 考古学手帖 6
- 8) — (1957) 静岡県奥泉遺跡出土土器 石器時代 第4号
- 9) 永峯光一 (1955) 千曲川沿岸地方における晩期縄文土器に就いて 石器時代第1号
- 10) 大山柏, 竹下次作, 井田佐重「山梨県日野春村長坂上条発掘調査報告」史前学雑誌 13. No. 3
- 11) 末永雅雄 (1944) 宮滝の遺跡「奈良県史蹟調査報告」第15冊
- 12) 山内清男 (1937) 縄紋土器型式の細別と大別 先史考古学 1 No. 1
- 13) — (1952) 第二トレンチ土器概観「吉胡貝塚」文化財保護委員会